小栗外傳二編

13
204
8

小栗外傳

絳山翁戲編

北辰政画

金栄堂
合梅皇閣

東京帝国大学

寒燈夜話 小栗外傳 卷之六

東都 絳山翁戲編 陳人戲編

第十編

舞妓哥と唄うて密計を諭す
老僧因て説く未前を示す

小栗判官助重を馬を乗あさめく。静ゥ御模山ゥ對ひれを做せど。模山ハ頼きんゥゥは鬼駙ゥ容易ゥあづめふれ豫ての謀相違し。仙中易ゥふびとしゥどもまゥ謀ゥぐきこともめゥふめと心ゥあゥめゥふねゥこゥ共ゥびの色を形し。某ゥ日須の望ゥ共ゥけるゥことの喜ゥびゥと小栗ゥ馬術を賞美し。酒宴をゥゥうけて食意ゥね。さて豫ての約速ゥゥゥゥゥ絳ゥ照天姫と婚姻を整ゥ。此日ゥゥゥして助重を照天ゥゥゥとに止ゥ他事なくさまゥゥ待遇ゥアゥ。されども模山ゥ仙中ゥゥ。奈何ゥして助重ゥ夫ゥゥと蜜ゥ其子供ゥゥと謀り

くれば。太郎。次郎の兄弟は。恐慌する照天姫を小栗に奪られ。会合もなるこ
なく。討果さんとおりふ西なれば。二人を召し出ていくりろはる小栗とて鬼神
おもはるゝ。彼足と迂遠なる謀を用ひまこと鬼騎がごとくあるべし塗を
塗を附るがごとくなるべし。不如速ふ人数をりて討ん。と申しあるを。
三郎安武これを制し。小栗主従の武勇慢ずと力をりて討ん。とせば。
味方のものを多く損じ。且は討漏さんことをうるがごとし。幸明日は父の生
誕日なれば其毒を以て被露し。小栗をまねき酒を強て乱酔の射を
をうて毒酒を呑ちめんぬいろは猛き助重ものせよ。と下さるべし。
失ん。と案の種なり。人くいろに恐ひふと述れば父の安秀をもて。
兄弟も浪りなく喜び。これ千金の計策なり。いざ。ならば甚准備をせ。と
俄に酒肴をとゝのへ小栗をまねふ云なり。明日は我生誕日なれば。

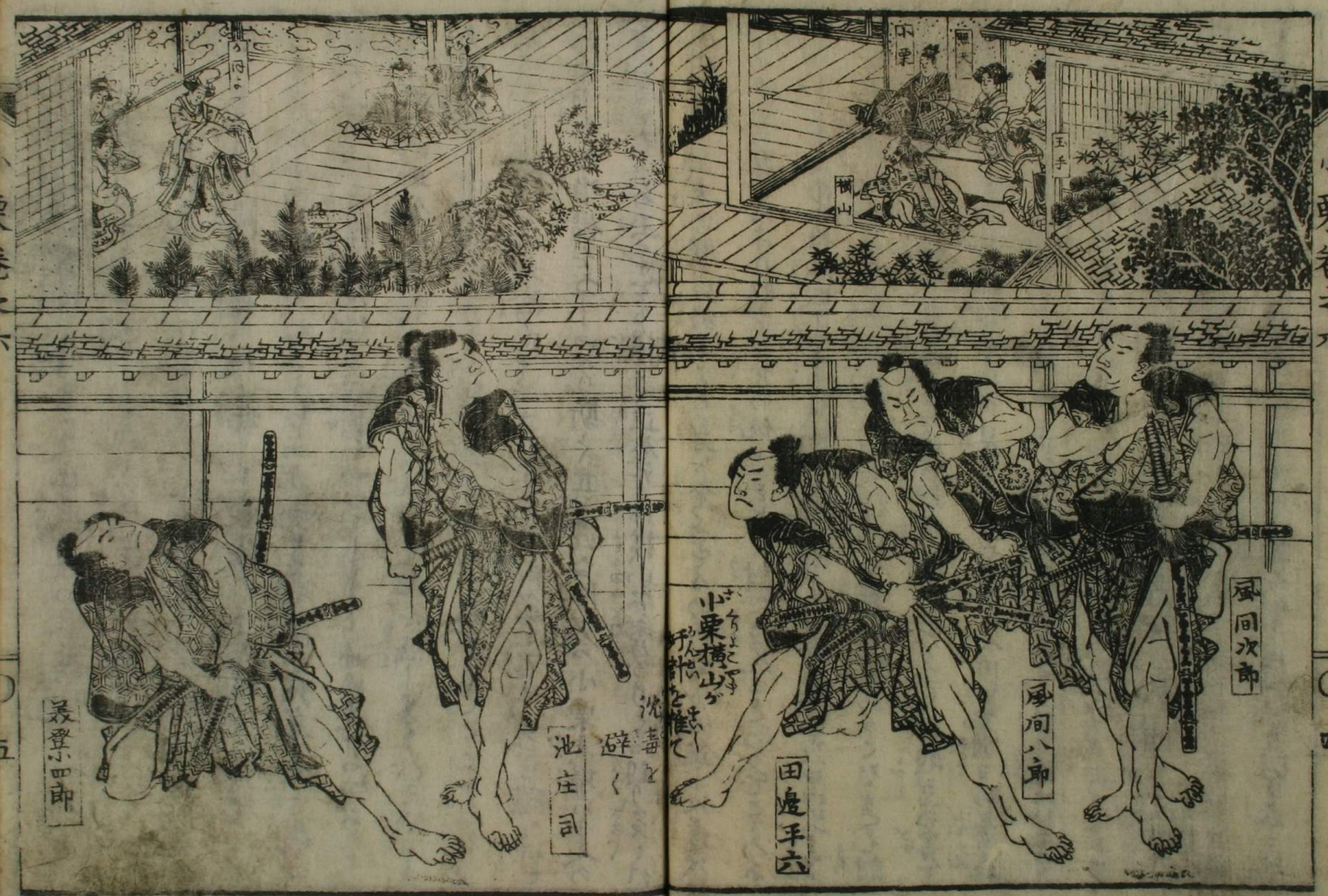
壽延を祈さんとて夫婦も其席に連りて我壽を賀ものと者ども
小栗夫婦辞べて申ふ。明日の事宴ものとうまくあるこ
ろなめと回遠して使を還ひ助重照天姫と数ひ明日のこと清水ものも
おのおのそこ同ふ照天冒をもて。安秀が近日の先景。公を沼ぎ体み
のみなり。殿とゝ申ふ世なるべし。鬱ふ。恐さものこと云罵こと
より慇懃に待遇まふ。と不審さふ。どうり。是と彼とを想
あるこれば。明日のるゆと記御し。爾を辞まば怪しめられんこと
もて宜からんとうち案じ。俄然として藤を指て立つ。
こゝ申ふ。きものの故武蔵國六浦の産ものなり。
今の横山の侍女とうてゆば。横山が為よりの流を唱ふ
奇なるべうしを奴家便なるべとふ。強ものを。侍女とせりこの

志賀忠四郎して且奇絲の伎をたけてゆを漢山潔くゆえ人やさじか
ゆえ似ごこれを見し終ゆ我物とし酒宴あるとゆえ敢ばとゝ〳〵来候
しと卒日ゆ側を去らしめゞ大事を議志席ゆも立入〳〵せり斯ゝ入り
樸山ゆ寵せらゆほどゞ甚公樸山を怨ひこと甚ゝたゞ奴家ゆ娼婦ゆ
賣ひめざりし代深く恩ゆ著。我身のことを減ことあれば忍ゞ告ゞ
たゞれば明日のこともおもゝゝ知りそひうんゞゆる密ゆ娥を招れやゞ
と。ゆゝて呼寄して来のゆうをせけば。娥何るゆうゆ知りそゞゆ後ゞ。今日
樸山及兄弟の人〳〵と蜜に議ゆふことありて俄ゆ明日の夜其他俵
ゆり。甚絲不審とゝ人ゞ。ゝゝる謀志つると知ゝゞ。明日は身危ことと
めゝゞ忍告ゆゝゆせんやゞゆ。深く悩ひそと思ゆゝゆゝえて
去ゆゝり。小栗を娥ゆ拙語代ゝゝゆ居ゝりゝゞゆ出往〳〵跡ゆて照天姫ゆ

對ひ明日樸山ゆ壽宴ゆ必定我を謀なるゞ〳〵。彼ゆゆ陰恐ゝゝゆ
ざれと名ゆ勇士とゝ人ゞゆ。運極るとゝゝゆ痴夫女子ゆ手ゆ落命者
和漢その例少ゝゝゞ。明日の命ゆとなゝゞ公遁まざれゞ往ゝゞれゆ聽〳〵
ゝゝゆゆ似ゝゝ。弓矢ゝゝ身ゆ名ゝゝ惜ゝれ。是彼のこと思ひ悔せゞ。
あん身と語ゝゆも今夜限りと成りやせん。嗚呼定めゝゝゝ世の中れ
ゝゝひゝ。今日までゆ云ゝで過〳〵ゞ今夜名殘となりもせゞ怨こゝゝん
ゝこの公憂ゝれゞ代へゆゝゝゝゝ山身は父ゝる光長の樸死ゝ樸山
安秀の所為ゝゝ。そゆ這般〳〵のゝゝゝゝて知りねと前日道助ゝ語
せ〳〵ゝゝ。ゝゝ形〳〵詳ゝゆ代へ知ゝゝゆ。照天姫ゆこれを代ゝゝゝ。ゝゝ
臥〳〵嘆〳〵ゞ。ゝゝて涙をゝゝひ胸をゝゝ歯切声代震へ〳〵云へり
ゝゝゆ知ゝねゝゝゝゝゝゝ云ゝゞゝ。天ゝ人共ゆせね伽と。一ツ家ゆ住居〳〵て

朝夕敬ひかしこまりしが想へば念願ようし今知るうふに束間も打捨
おくるきとうと小褄を高く裏はぐ長押よりかけ眉尖刀なる小脇
ふかいとみいきまきたく走り出んとする処を助重暫時と推止めら
ふそ道理なるぞら我云處をよく分ぬ樽山幸都ねれど丈夫なり
ぬ五人の子どもとじめ猛悪淫乱なるは中へ女子の唯一人義勇達
ちて向ひるが石を抱ひて深淵へ望り尚危ふ返討まも成なるぞ
いざ孝子といとるべ死我世るを告ぎりしが斯めるぞしとゆくべし
たるき行伏一人の俳諧をうけるふう篤光の女児助重が妻なら
ぞや父や夫の名を下とを本意とぶしきいのふとこそうなると流
ひ目で照天姫ならるぞまの連とゆて御ゆふ公を静めて云りなれそ
女心の一とぞふ想ひ迫とくるかとなく物狂ひしふるまひ殆非命ふ

死んとせ死夫の賢れ教ゆより対を全ふするのみるふだ正れ道成
ぬるりしりさんさりぬぞら父の仇をこそ討でるんことらでこそふ
忍びたぞんめられ君奴家が力成助け仇を討しそうれとかれは況つ
えるは小栗助重うち疎首某とても樽山へ勇れ姫云のことなるそ討
えんとら想へども彼へ春属多くれば討接ぞるがなるくふ我対の害を
惹出し宿志を遂ん妨なれば是ぞうちるそぐりしそ明日の壽莚
の附宜みより討果さんと想ふんされども前ふ云ざとく若運はきく
失ものせぶ汚対此所を逃れ出我郎名と心を合し樽山がとふさふも
いるど我父の姫云一色成討てとぞうり云さして鬼神も歎く助重ら涙さし
くも嵯しさん明日の夫婦の生別是とりのが知ふさる兆しや照天姫
もうろともに涙よくれて辱うりしが。やるら涙をもしねぐひとふまるれ


小栗横山が
計略を推て
風間次郎
風間八郎
田邊平六
池庄司
義祭四郎
池毒を
避く

余り恐ろしく思ひ、是は武士のいうで横山どのゝ失ひたん。
りことあるべきこと空しき死をば做るらん。奴家も武士の妻なれば、
いさぎよき討死せん。身を厭ふあらざる程ど、苦しき処と知り形うら
恥ぢるまいと拙臣君の病と称し、奴家のこと参らんと言語さびく
やこゝ少れば小栗殿を左右のうちつゞり。今日まで恙なく身を明日俄ゐ
病といひて心竟横山殿恐れ我妻をゆゝて逃げ〳〵と世の人口かうんこと。
生く世とゝ恥辱なり。我心既ゐ変せり。いとく心を悩ましゐ明日を
夫婦法ともゐ横山どのゝ恥ん。くそぐもちやまりてことを仕損じ
給ひてとうく〳〵やへ諭しけり。さて十人の郎等を召し密ゐ謀を示し
今世明日の准備をすべいる。斯く其日にありしうば小栗夫婦ゐ十人の
郎等をちゞめ玉まを俱して正屋なゐ横山安秀がりとゐ到り来られ

物なり。生誕日の寿をのべられば安秀喜びとるさゐ山海の珍味
を整へ五人の子どもをして多くに食意ゐ小栗をゝ兵糧使や
ちつゝんと隈くゐ心ばくるどさるとのりとも久ざれば少〳〵心
ゆり酒酌ゐ〳〵うち真〳〵ゐ照天姫ハ横山を父の仇とおり人で心裡
乗〳〵ゐ。さりく小栗ゐ目配せを助重も其心を知りけ組一ご横山を
討べき隙もめぐらば。此所ゐ長居せんハ詮なしと思ひ酔ゐたるふ
りして巳さでゐ其席をまろりるんとする時。横山安秀小栗ゐ對ひく
ゝ〳〵ゐハ足下知ゐ〳〵ける女ゐ我りとゐ娘とゝ了嚢のゐ。ここ
照天姫ゐ侍女なり。年若ゐれど孤燕ゐ業と粗ゐるれば客人ゐる毎ゐ。
ちれゐ舞ひて興を助ゐり。今日も彼ゐ一曲を奉さゝべゐふこれを
肴とし今一杯を傾けゐんとゝ〳〵むるゐ助重辞さんゆうなくそハ真有

幸にあてがぐらん。やとく弄さしまくと望こころる。安秀笑壺からつく。
それくことありそれば。豫て仏を沢ろうろん嬢嫁束あふ〳〵あて水干ふ
立烏帽子著。席の中央ゆ弄生ろう。助重これをえろふ。平日ゆえ一
とうことかろう。鄙ゆえ卿ね姿ろこの。そのさうゆ正よ初花の綻んとさとぶ
ぬく谷の戸あけて鶯の初音に拍〳〵き声ろうあげ。

忘れても汲や志ほらん旅人の高井の奥は玉川の水

と云古歌をもーかくーく三度まで唄ひさるゆ〳〵ろう。見図の人くーと弄ゆ
のこ心奈ま。唱哥のことばつくく幸おく。たぐ叡どよめたと真ーろう。小栗
夫婦ふこの哥とゆ。彩は妻の延ゆ一。此哥を唄ひめべきふあふぬを。推座と
三回ようで唄ひけること。ふ〳〵昨夜物〳〵けるこのあれば。横山が巧のろと代
明白ゆ云がく。哥りて知ひしてこれなるべ〳〵。この於い高井山の玉川と毒水

なれが人をして飲志あーこ。大師の淺ゆくるろりとれをりて足と想くて。
此後出と酒ゆ。ゆ〳〵ど毒ありうんと。悟りろれがま婦目と目沢え合一ろふ
ろ手を知ひしゆは。これより後い共回も盃を取るべ〳〵。飲そいゆりてを。
一滴もほくゆ入ゆど居ろうろう。横山親子い嬢ゆ流し唱歌ろれ幼ゆ。
ゆくく小栗ゆ酒を呑ぐろをもろふ。今ろそや想ふゆこに流ろうと盃
ゆ注ひろう。小栗ゆ郎ゆの此酒を呑や志ほると。寒ーゆ炉うべおのづう
秘ひの色面ゆ彩見ひ。安秀ゆ心ゆ。小栗ゆ彩をうちえろゆ。常ゆ弱し
光景ゆれば。こゆ正ーく毒酒の験彩ーくゆやと。心嬢ーく助重ゆしこのひ。
ひこゆろをふ。彩ゆ世の常ゆこれおろうろ何ひのう想ひしのふ。今日と
[illegible]延ゆう。添く物ゆおりひゆひととゆうろゆ助重ゆ[illegible]
ゆて奥ある妻延ゆて。いうで物をゆ想ひ。ぐらん。いうなほろゆ。鐵ゆ

乙姫殿の去うなり。此ハ席を堪へぐうやうく退んと存ぜんとて人の
おゞ〳〵の所ども畏こけ見て。彼ハ伝りにたゝん。今ハ〳〵やハ免ず蒙ら〳〵
ぞやと云ふ横山心裡あゝ我誌ろわりと密ふ喜ぶといへど。つゞと驚ひ
さ体おけもし。そハ知ふねことそて。とゞめまゐらしはるこのこゝろ色。
伽人苦しかいんをく退り経しそ。ハいとそうあれしゆよ照天よ女婿乃
心ち伽つゝぶと宜ふふ。清〳〵まゐ〳〵せそよく着病せよときゐぐちそ
いひ罵り。慶様まで助け送りて別まけて此付丘岡加太郎ハ加茂郎
の兄弟待らけて助重を助け伐んとて。小栗ら藤の郎名居ふざるを
こそ心程ふく怪しみ其行衆を問へば。丘岡兄弟畏りてもう。我く
までも横山屋のハ食変ふあづり。誰〳〵もいく酒と酔ふ。ハ佐仕る
ぶうあうえくぶ〳〵程ば。屋あもハ笑へあげそハ前と退〳〵ん我く兄弟へ。

知ふ〳〵めとごとく酒をとのられば酔どろ〳〵みちぐりかなんと回憑
ず者を小栗心怒るハ且怒。彼ハ酒をとうふ酔て物の用ふたゞ
とゝふふ正〳〵毒酒を呑ふふあそあゝ。ぬる手段ふもうさ無念の
ふなり。多くの郎名を害せくれいうでありく帰らうべき。刀の後ん
限り。横山一家のりのどもを切殺〳〵。郎名の伝を報ふんとゝとゞよそのの
色の面ふ歌まれば。丘岡兄弟とれを猜。目ばりく知ゝし。朋輩名ゞ
酒ふ酔ふふ常ふも知ふ〳〵也。今日酔ふ伝をゝゞ怒りふふ。
ハハ色を和ふくハ還りあれしと。助まゞまとふそ。強ちふうて還ふふ
処ふ既間兄弟。矢壁小左衛の三人出逢ふふ。小栗再びおゝ。
酔ふふ酒ふ辞て。物の用ふたゞごとふ〳〵酔の醒ふることを不審
ふれと。酒まゞ。丘岡兄弟回憑ふふ道理ふ。昨夜君の

命を果さんが。今日樓山のうとふ糸のごとき伏置やと家の隅々。物の隙ゐ毒をはくれどさる猶もうく移ぜこれ力なりて敵の
かゞとなれば。毒害なるべきやと。毒をはくらん。城ゞ寄遠の声れ
聞こゆるふ耳をそばだて。城が高野大師の玉川の寄うりさてい
毒害なること。城の知りて知ふ。ちなるゐこそ。人ゝとうく滅り
酒を呑人ゐ呑まを(ま)をして呑ばかくうて毒ゐ中に侍よりとを。我ゝ
より前へ還ゝ。君此地を落まゐん准備をつゝ。我ゝ兄弟のうとうを
酒を嗜ざる。が人も知りてゐ。悪ゐたさゐゐて跡ゐ孤り君れを佐
をばたうまゐり。斯てゐ樓山安秀。君をとゞめ。我ゝが家胡の光景
えとゞけと。自ら来るゐ男児を来もろ二の内を出べうぶに君い風間
兵衛の人ゝが俱して落ゐ。某兄弟ゐ此不ゐ離止り樓山向ひ。

君ゐ人ゝも毒ゐあゝり自害しゐ人が我ゝに家期の防矢衛で共ゐ自
害をと偽り。兵衛が偽と樓山をさゝ其後館ゐ火をかけ。その移ゐて
乗じ跡より来りいんと受へゐれば。助と甚深のゝに接ゝを賞し。
疲れまゝ立退んとゐ。ゐ人と。偽方ゐ落んと。躊躇をりゝ。玉くまゝと城
喘息ゝく走まて。ゐりゐれゐ君還ゝせゐ。ひゝ后。樓山安秀。主郎。次郎ゐ
下知。君の伝光景をえん届ゝ。若い年ゝ死もゆらでゐゐゐ首討ゐ
とて。部下の賊徒を催しゐ。これゝゐ且とえんゐふ心せゐれ。辛ゝて忍ゝ
ゝく落ゐ。せ月ゝ。さいゐ。城ゐ故郷。六浦ゆてこれより移も近ゝ。
彼西人主退ゐ。人ゝとよゝ議ゐも角も。ゐ人奴家案内ゝ。ゐ
といそぶとふ。小栗ゐ婦今ゐ究猿林ゐ投ゐるの附かれゐ。いゐで未と撰ぶふ
皇あらん。城ゐ。ゝゝ。ゐまゐ。小栗ゐ鬼駒ふうち。ふり。照天の姫ゐ美登

小太郎は脊負て。夙間兄弟あるの由聞及をかき荷ひ。玉手こかの国に成
ぬ。ひく。六浦をさして落くりたり。行もあらぬせど樋山太郎安嗣。同次郎
安春は父の命によんて小栗が死生を見届んと。部下の賊徒数千人をゐて。
此所へ来向ひたり。互ひその心照天姫成棄んと思へば。兄弟先と手ゑく
向ひたりはげしくふ到りそその家裡の光景を窺ふ。門を八字ふ開れ元岡
兄弟廣様は主頭巾と弓矢たづさみ高ちゃ腰ゐりたはる足に小栗
判官代助重の臣は。丘岡加多郎春教。同加次郎春高といふ兄弟乃
りのく。只今こゝふ来ると知ふ。樋山の人々とそうゑれよくも来りまくふ
こゝの邪汝ふ謀よんて我君あ殺くも欺れ。毒酒をきこ〻めゐ殺ふ
法会ゆるこ那く。今自害しまくふ処なりさるかくふ我く兄弟防矢射く。
汝ふを一く討た君は宮殿朔の後殿せんいざ忠義の鍬うけとめよとさ語ら

ひきたれば散くふ射くりしうば。利欲おもゆる盗人ふ元岡兄弟の剣先よ
もそれ樋山兄弟下知すれど。後へのみ走りごみ一間なくふ逃もはうば。
兎角するうち鼓の裡火発り焔くと燃あがれば。元岡兄弟弓矢を
投捨今ぞ呆ちて太刀ぬきかざし。樋山が勢ふ斬て入るば。
部下の賊徒兄弟の勇威ふ恐れ秋の木葉の散るごくしりくりと
逃失くり。相手なられば兄弟ふ顔見合て完爾と笑ひ。いざくらば君ふ
追着奉らんと。後門の方より忍び出うりさそまくこ小栗判官代助重
照天姫とりつともに六浦の方へ落くりしゅ仍て料らん樋山三郎安武ハ
小栗ふ呼者の人ふあくふ逃れ出ぼこゝもいふあとゝくの部下と
引俱に。後道の方に埋伏して居くりしが案ふ差ばと小栗夫婦同乃茅
兎堂小太郎玉手姫を伴ひ逃れ出うばさてとそとあり過に暴ふ紛て

生のうりれば小栗大きゐ驚るれ馬を還して戦ひ給ふ。風間兄弟美豆
小太郎主ゐる失ゐらんと気おそれ。照天姫をば。とゐ木陰より立ちのび。
玉ゐ城をしてこれを守り。三人一般ゐ力きはれて主を助け横山の勢と戦
給ふ。助手ゐさ〳〵も。此三人が武勇ハ万夫無敵ゐりといへども。ゑん無
不意を討ゐ。二つゐ婦人を誘ひ〳〵されば其仏ゑうれよく戦ふことを好ゐ。
且三郎安武千変万化の術を施し。彼方を討ハ這裡発り。這裡ハ制され
て彼方襲ゐ従四人をとりこめて新手と入替責ゐ防ふ。さてゐの小栗
ゐ従も労ゐ果てゐ人ゐ疲ゐ。忽然として横山が勢。後の方ゐ現れ
ゐ。ゐ往ゐ走り散ゐ。小栗怪しゐ敵はゐ立めぐり。望ゐ見ゐ
ゐより池庄司後援兄弟ゐ方ゐハ田辺兄弟。後ゐハ元岡兄弟。必死ゐ成
ゐ討入ゐり。忠義の豪傑七人ゐ切立られ。ゐ方ゐ皆ゐ敵ゐ散ゐ

ゐなゐて敗走ゐ。池庄司ゐ三郎を目ゐけて追矢ゐ。彼ゐ返ゐて付ゐ。
今ゐ〳〵や敵一人ゐ。ゐぐれば。主従一所ゐ集ゐ互ゐ無ゐ。ゐ
小栗ゐ〳〵で落ゐ〳〵ゐ物語ゐれば。元岡兄弟ゐ横山兄弟ゐ敗ゐ追ひ
散せ〳〵ゐのべゐ。時庄司ゐ。我〳〵七人ゐ従ゐの方ゐ行ゐ。一人の
老僧ゐ行合ゐ。彼僧ゐ云ゐ。汝ゐ主人ゐ今六浦の方へ落ん。途ゐ
城ゐ入ゐ苦ゐ。ゐられいと君ゐ。ゐ〳〵ゐ敵ゐ。ゐ〳〵ゐ駆ゐ。
ゐつゐに果ゐ。ゐ僧ゐ教ゐ。ゐ〳〵ゐ有ゐ。ゐ〳〵ゐ戦ひ。ゐ〳〵ゐ三郎
安武ゐ討ゐ。その首ゐ助重ゐ実検ゐ入ゐれば。主従かぎり歩く喜び
ゐ。庁岡ゐ近ゐ進み出ゐ。ゐれゐ。前刻ゐ事ゐ。ゐ〳〵ゐ姫君ゐ
事ゐ問ゐ。ゐ〳〵ゐ。小栗前ゐ城ゐ。ゐ〳〵ゐ
囲ゐ付美豆小太郎ゐ。彼ゐ木陰ゐ忍び居ゐ。小太郎ゐ

小栗夫婦

従臣を将て

権現堂村

に走る

小栗主従

横山大炊

横山大炊

浮田内大臣

浮田内大臣

伴ひ来れとあるに。更に命をうけて前の木陰に往てみるにこはいかに
玉手朱母迷ひて失てあり。照天と娘らが其影も見ず。あまた侍臣と其辺を
尋ぬるにさらに知れざれば。従者ら咎めて立還り。斯と告れバ小栗を従
うち驚き主従十一人手を分して。呼叫びて尋れど。木魂の回響のみにて
其影だもみえず。小栗助手切歯斯ぞなり尋ねて索得ねバ。必定彼の
為に擒となり給ひしならめ。さはいでも我々主従斯てありながら。此所まで
相倶し来つれ我妻を敵に奪れもあへしど。此まま在らんハ云甲斐なし
是より取て返し。横山が館に斬て入り。我妻を取かへさんと想ふなり。
人々いかにおもふぞと問ふに十郎等一般にいかで命を惜むべらんいざさせ
給へと云うちにも池庄司ハ涙に咽び横山三郎ハ我母の讐なれバ
それとも知らず我手にかけて討なしハ皇天の憐みによりてぞ候らめ。
君の仇なるに望みあらば前に進まざるは不忠に似たらんと。母
の屍を取揚置に忍びず。せめては其形を隠し。今後より走来れる人よ
我が身の仇眼をあらわれと。其へめぐらば助さらも其孝心を感じけり。我彼
るハ私にして汝がためにハ孝道なり。いかで孝と私とを分べき我も共に
汝が力を助け。玉手が埋葬を営ん。人々も孝子を助け給へと。いとも
賢き主命に。池庄司ハさらでも云ひしを陪従郎等一般に。仁愛深き主命
を感佩しつつ。暫して洞穴を入れし皮篭をかりの柩と助長が母の玉手
の屍を泣々おさめ脊負ひけり。さるべき寺院もあれかしと四方を望みし
折から遥に聞ゆる念仏の声に小栗ハ喜ひとは幸のことなりけり。今
此所に来ける僧を頼み玉手がうへ導師とせんと念仏の声をあてに
道を急ぎ尋ね至れバ。一人の老僧白き髭ながらかしこに蔵る

衣を穿。左まよ一鉢を持げ。右手に黎の杖を携。栗ことして歩こ給る。その殿ふ臺際の衣冠ふ青法師二人従くり。ゆとなく立ふくもぶえけまづ。小栗ハ深く信心を起し恭くれをして云つりうはハ。某ハ小栗助重とりのもてゆるり。郎等のもてゆ。池庄司助長とりをりの母不料も丞ふかアて没命ゆ旅路のことふ。くべまづ。埋葬とべて寺流もなく。新こふくとかゆ。偽もおんさまと。いと幽憂想ひ悩こくり。ふ不意ゆ偽のこゝふまううきのゆこを幸ゆり。めうれ導の師となりまうれし。やよ助もよ泄もとゝふ。

まりて彩みをまとなるふ助長涙もぬぐひとゝみ近つて老偽ゆ孰つく。

えれべこゝふ前刻よ主人の危難を告ゝ偽ゆれば驚るれたゝもれやるし。

前刻ふ偽ふ遣まゆぶせべゆ主の危難を救ふこと祈りぎりし。ゆ敬よ偽く

某ふす忠ゆ孝さ」給くり。此潤恩いつゝ忘とゆゝとべた。よく未然と知

ゆまふゆ正ゝく仏菩薩の権化ふこそもとゝゝゆ。つるいこべゆ偽よ。

まこと環舎こゝゆ佛神三宝の冥助とゆひくべ偽ゆり。頼くゆ大慈の恵ゆ。

非命ゆ死せゝたふちゆ。仏化を汲ひこゆひ祈と鬼をも欺く丈夫の母れ別

の悲しゆ涙せきゆるうるみ声。云ことさゝくもゆやなゝと。孝子とこゝゆ

知ゝれゆり。老偽ゆちゆ烏滸やよ助長こゝ助長こゝとゆら嘆きゆふ道理なゝ。こそ

渾因縁あゝこゝなれば嘆くゆるゝ不孝ゆゝ。そも菩道ゝ相州蓮沢ゆる。

三尊光院清浄寺の現住常阿とゆりのもて偽。足下ふゝ従の前世ハ

我まに因縁あゝこと。且ハ過去未来のことまて。昨夜記吉の夢相よゝゝ。

詳よ知まべ前刻ゆ危難を告て主ゆ救に。今又こゝゆゆるゝて後事の事を

流んとゝと。疑念を発さゝ。菩道ゝ三昧を聴ゆ人ゝの足まで難苦ゆ達ゆふ。

兄渾命ゆり。今日既ゆ九死を出ゝ。一生ゆ辺ゆゆひゆも又命ゆり且小栗殿の

内君を失ひ給ふを歎じ給ひ。其行衆を捜索とおもへども。こゝを労しく易なれのみゐゐ。ゐゐ。ゐゐく身の害ゐ及ぶべきことわれば思ひ止りゐまへ。内君の観音菩薩の恵護しめ給へ百折千磨ゐハめゝ節を失ひ給ふ其身悪なくて。后夫婦再会して栄ゆくことありね。其ゐよりも三下為の劫て居ゐ。歟再び寄身り。生路を求ゐ易ゐ。我身ゐ身り如此ゐゐれ湛を以て其禍を免れ身人と熟ゐ説ゐゐゐ。小栗主従ハ托行上人の事ハ豫て使人共徒をゐるみおりゐゐゐ今ゐゐゐ感涕の涙とゐゐ。悲附のゐもゐ云ゐゐ助重ゐゐゐ。凡俗の我ゐ。過世の因といひゐゐ菩薩ゐ拍しゐ偶ゐ値偶しゐる人冥加めゐゐ。ゐ已ゐ示ゐゐゐ。ゐゐ

はゐせゐ寺へゐりゐゐゐゐ。ゐ尚ゐゐ上のゐ頼ゐゐゐゐゐゐゐ。ゐ旦ゐ。常阿上人ゐ。ゐゐも貧道ゐ言語を聴ゐゐゐゐゐ。歟のゐのせゐ其前ゐ。いざゐ人ゐと。付ゐゐゐ助長ゐ。母ゐおゐれゐ無ゐゐゐ。躊躇居ゐを朋輩に慰められて漸と母の屍骸ゐゐゐ。茂沢さして急ぎゐ

第十一編

妬嫉欲を逞して二娘を宿を義婦身を殺して女主を殺ふ

且説常阿上人ゐ小栗主従を付し。茂沢ゐ清浄ゐ還りゐゐね。此時ゐ是應永三十三年九月廿日の事ゐり。上人身ゐの傍をゐゐく大穴ゐふ坑を堀ゐし。薪をゐく積ゐ。其中ゐ玉ゐ身屍をおゐ。ゐ火をゐゐたれ折ゐも。樵山太郎。同次郎ゐ。昨日片岡兄弟ゐふ欺ゐれゐ易ゐふねゐゐゐ想ひ足非をゐゐど。小栗主従を討ゐんと。近郷の山賊

数百人をかゝゝし。其殿を逐てゝ此寺ふまり。小栗主従のことを問ふ。常阿上人撲山兄弟ふ對面し。我昨夜金澤ゆて小栗主従ふ行遭た。彼輩酒毒発し苦痛ゑ堪へどとて。生べた乞ゆめゝ孫べ。後世のことを知ゝふ頼むよしをはへゝはゞいと不便のことふおりひこゝふ住ひまりしふ。終ゑ自害して果ヲねゝ。されば其屍を刈ゝたゝゝふこと。玉ゑを茶毗する。小栗主従ゑりと敷ゝ居ふ。上人の偽ふざるとゞ。世の知ゝ処の代ゞ邪智源き撲山兄弟も。さてゝ爾めりたゝよとゝふふ。玉ゑまゝ屍を焼ゝ息きの去ゝれゞいゝゝ疑念ゑゝ別を告て去ゝれゞ。上人小栗ふ對ひ今ハ色易し。然ゝとも此寺ふ居ゆゞ。人の疑ひめり。貧道三州よゆりゆゆとゝ。人ゝをゝ彼所ふ忍ゞ居ふゝゝゝゝ。心をゝゆふせゝど時の至ると待ゆ人。自ら志を知る期めゝんと教めるゑ助重上人の言葉ゑ。十人の郎等

東都　絳山獸醜陳人戲編

第十一編之下章

不在話下。再説照天姫を撲山ゑ逐ゑふ襲れ。夫の行衛をさゝ人ゝふゞ。殆危ふうりをゝ玉ゑ甲斐ゝしく敵と戦ひゝゝゝ。これさゝ人ゝ対れ娥一人を伴ひ何方をそれと糸方なく足ゆまゝ。して走ゆふ娥を雄ゝし女ゆゆゝ。照天を誘め励しゝ。我故ゝゝゝゝ六浦の郷ふ住ひゝゝ。そも此娥ゑ素性を尋ゆるふ武蔵國今澤ゑる。侍従川の辺ゑ住漁師細六といふゝゝ女児ゑ。母を爰浪といゝゝ。娥を産ゞ。産褥のうち細六を没命ゝゝ。爰浪と女乃一人世ゝゝふ生営なきゝゝふ。ゝゝゝ飢ゆも及ぬゝゝゝゝ。ゝゝふ其里ふ

毘留法師のありさまはかなくこれも愛浪と同月に女子をまうけしかば壽て
わどなく失ふられぬ夫婦悲嘆に沈みそのを血屬これを歎めて亡ふと
想ひ慰めよと娥を貰ひ娶ひとりさーり愛浪を子故ふ分のかうぶれ
もまうけるとぞいと惱ましき娥を毘留法師ふ女ゝ已が分とりと
なりつ乳汁あるこそ要ひなれさるべき方へ乳人を出せやと海金ふ赴
くあふ此南村小栗助重宗なりそその乳人を立ひしかば縁ふよりて
此愛浪を宗重ふ娶ふ。ありてまうと娥を毘留法師ふ娶れ。ゆうく成人しぬ。
三世の作業や悪うるん。犯の縁ふ落くて養祝二人相續く没命
けるぞ。娥ひとり海士舟の揖を斷ふ幼地そいづちく歎ん便もなく。
嘆きうとんど詮ふ人なく。若き女子の只ひとり世のたゝまひうりかく。
危やせん角やと想ひまうせば。愛浪を小栗家ふ給ふ人の立安と

なりしよし。緣ふ風声ふ生つれば。彼而ふ往く分のうへの。幸なこと
けそうぶ。闇ふ元ともめうるあと。ふをきゝふ故ふをたち出ふ。途ふ
ありて横山が為ふ勾引され憂川行ふ沈むるきを。照天姫の情ふ因
横山が許ふ分をよして。給ふ居ふ。かゝふ波をりて。照天の
危難を助け故郷六浦ふ伴ひまつる。七年がほどもるーゝすれば
むかし程ーうるし人も失せく。侍るべき方もなく。左右とるうち日のもや
ふ分ふられぬ。今夜を仮方ふもめれ一夜をあかし明日こそ静ふ知音を
尋んと。行従川の辺ふ徑ふるふ川辺ふ出る白砂あり。娥
此邑ふありし沒一面の六文せ。演七とふ人の家なれば。今夜ハこゝふ
宿をかくぐやと其柴折戸を敲けば。もと回廊ふ四十ふ余る女孩
ーて生まれ。誰と問ふ娥姫新ふ。ところふ露ふ。ほとえなくしみ

り門差しけるかとそつつゆ。家ハえおぼえあり。こゝ家主のうつくしき
ゆゝしく今さらゝ化ハ行べきもあらぬ。是非ニ宿を借ふやとまいい賢七
ぬしのハ家ニゆゝしどゆ。と乎ぬれば女を演七しゆゝハ去ニ年没金
此家今ハ我まゝ小助とゆゝ住くるゆ。と仕へくるふ娘ハ土うのじ
主ニ所漏ゝ化し化の知音をまゝすんと思ひしゝぞも又演七ゞおいくふ
あふゞ力ゝきるゆなり。且ゆまゝい四方と呻吟ハ姫君労れゆゝ
不知こゝふ宿を借らゞやと。奴家ハ相模国より武蔵国へ赴く考て
ゆゝるゞ。伴ひしゝを後れ途ニ迷ひ。こゝふさゆゝひふゞゆゝあられ情ふ
今夜ハあらさしてこびてんやと。慇懃ニ乞ふる。主の女ハ照天城ゆゝ
燃をうるふ。眉目麗しく。天衣無縫ニ美いと清らかゝ物ゆゝ
やかくゝを和ふゞ。そハゆをそれやとゆゝふくべんと此地方の制とゝく。

人ニ宿借ることを禁ゆり且ゝそまも家ふ居ゝ後ハ。かゞゝ兼門ゞくけれ。
又まゝふゝそれゞ由ゆりけるゆ上着のふゆも習ゆゆ余ニ迷ひ。さゝ
怪まゝくもゝとゝんふすゞけゆくゝいひく去ゝゆふも鬼しれゆゆく
心ニ忍びゞれゞ蜜ゝにゝゞめはゆゝふゝゞゝ。後刻夫の還ゆゝふハ。
音せゞと忍びくおゝせ。いさ這裡ニ入ゝせまゝと使ゞゞ二人ハ去び
家行ゆゝ上女ゆゝれと心をそゝ一室の裡ふ請ゝ物ゆゞ食ゞ
さゝゆゝふゝゞゝゞふ旅ハ憂りのゆてゆと使ゝゆふ人ゝとゝしゞひ
ゆゆゞきゞゞゝくもぼゝゝん酒ハ愁を拂ふ玉帚ゝゆゝ一杯と
さゝゝめ聲をゆ時け且を労ゝら歌ゝまゆゝふせんゞるふ一瓢の酒ハ
買手んゆゞふ歩射行ゆゝすゝゝの間ニ奴家ハ夫の還ゝゆゞ知ゝれ
きるゆうにゝてこゝる忍居ゆ人夫ハ頑ゆゝて乃ゝちとゝふ時なゝ退

出しまゐらせんと。扨ハ申侍る那りし忠ぐち咲へ小げなるか上尉乃栩の陶を提慌芒けれ出去けり。照天姫ハ主女の忠信しく款待を喜び。嬉しく心安堵に倚け助重の行末いかにと思ひ出され案じわぶるのうちにも照天姫ハことさらにけのきへもいろぞ涙に志づみ思ひくらしく流浪を娘達や安らしいかに姫君殿の所るを覚束なくも思しけれ。御嘆きさることながら縁て知らしめをおぼしくも小栗判官代助重公とやくハ関八州のそのうちにて打物とつて鬼神とくもおそるゝほかなり。横山ごときの敵對に蟷螂が斧もて車を止むるに似たり。いかで侮る天のゆるぎ。ぬ強くおぼしめせ。こゝハ旅の宿なり。壁に耳石のものいふ世の中に。みだりの言語ハ宜しからず。明日の奴家が犯しれりのと捜索ごころに何者を忍びつゝきき危も角もせんなるか。為ど雌しくおやしなどと御ふかうくと

心ハ奈何ぞせんと弁かへて胸を苦しむぞありけり。かく係祈かゝら帰乃紙門をさと引ひ立出るものありけれバ。二人のあるかしと静めて見ありかくりて見るをるれバ手齢十二三とおぼしき男童子の継しかるなが静くと。二人が前に進み来ると主人云へりけるハ今夜旅宿しまゐらせし紙いかなる人と思ひしに日今物語志すかを。紙門を隔て聞れバ小栗助重君の内君なるよし。頭てなが笑及びけるか。照天姫にておはしますや。御中意まこそ満重が乙子万代とて世ふかくて幼稚して兄なる人に別れたりしかされバいと懐しく想ふなり。そのときの人のしうて斎せんざるをえずもかみところにハ出来けなりと云ふ照天より嫂を縁く母きるの志つの伏屋を出て居一人の身を舞けりしと笑くでもそれの貴人の飢ましおれバ遭ふまじものなりと想ひいとくしくなんとしらありけるか。今夜不料も

此家に宿りを借て留る。還俗なれば此日比恋しと想ふたふらめと遥々
こゝもめぐりあひと。我うれしく喜びの涙袖をうるおせり。照天姫は我夫の
貴と心ゆて喜びたり。万代おうら對ひ殿の平生を宣ひ。叔父万代
ぬしの所へはいまゝ。斯かゝと奴家こそ照天めでたくぐるまり。不思議の
所は不思議對面をるこそ嬉しけれ。奴家こそ嬉しけれ。奴家こそ
の縁故のいろ。そこゆゆうゆゆしくへ。ぬしせんぐ。ゆゆしくは叔父なり。
今は手隔ぬぐ。漁夫の名を忍びぬ。事の始終を物語り給へ。と
涙ぐみ問へば万千代さしぐむ涙をもーぬぐひ。想ひ生るも情なや。去る
應永三十年父上小栗満重公鎌倉殿の御不審うけ。西領を召に贈
居しを。我の科のなれよりと。嘆かせど一色が讒言ふさへられ。我の怨恨
まして自ら多年を攻のふ父上これを聞て。我一色と戰ふ。怨のやうと

知らせまゝ。想ひのあまりふ鎌倉殿の御せさせ給ふ三郎よ。君ふうとうしん
こと辟ことなれば潔よく自害をなして不忠の名を屍の上に負ーとて遂
生害ーーーふ其時童子は弁がうく。注悲くて居りけること母人よ涙ぬ
らん。嘆くと生られと。世を忍ふ名ン憚り給へ。そよこの国も遠くなること
なれを痛め夜行て。こそかとくやうと忍びつ。辛うじてやうくと母の故郷六浦
ふ。やり。昔の知音を尋ねる或ハ他邦へ赴く。幸ーもあり。且を世ふなれ人と旅
分と。おもと方もあうしふ俗の知音の残て居て。我く親子が光景を便
なれのと懐て。時分を待ひ居ようち世家を小夜といひしー。襲任ぬく
妻を索むよしさいふのことなりと母の義娘童子をはれてこふ娘り。
も舅母の会使こゆふ。もことと小栗の乙子とハ。你く世をハはくむふ。
今をうりしてハ小かをぶ父と慕べとあり。れどいうよ保世を忍べども。一域の

つら
六浦の
きょうえん
漁村
しき
母子奇遇
万千代
小人
竜天姫
蓮良

主の子が賤き漁夫を父うとらうで嘆くきことらと。背ぎれい母人のいせ
腹めちうきくふ泣つ見ぬ。聽てなくふ自害をもせんざれ
ゆうにうくわれば正なんことをもおり人ども母の命れ給べうぐ。なんだ
も落して今日までふ及びけれど。無念やらん日とてもなく。寧死人と
幾千回見ぬ。亡父の仇と一想の一色を怨ざれば子ゆあじ。
と。我と心をとり申。ぬくく見ぬ。墨舎く父うの仇と取翁の祇
を告まあせ。ともに敵を討んどりのと其志まいあり好ぐふ。語やとも
涙まー。我母人のこ給ぐ人。絶子悪をの好をとう。兄を尋まの旅発を。
ぬう。止めまふいあ今日までに過ーふ人ーお今夜不料人ふ墨舎ーを
嫌ーれとく兄公の居在家をゆーてあじ祇ーゆえうは。照天の初めを。
万千代の物語をとうちふ泣ーんとの涙ゆこのうあき

んーぶやをら涙ともーねぐ。判官代助ぐが修行堂村ゆ来ほうを初めとし。
鬼神の一件毒酒の危難。且前切ふ追まふ遭ふ散ーふなり。夫の行衛をちふ
ざふまぐと涙うぐーに語りんれば。万千代これをゆメ乗ぎ手ゆ泣ーん
助をゆえんまとうひきも。行衛ちれんとゆべーとんーうもいうを
忙後ぐり。其附城をとーみ出。ゆうみ和子ぎみ前刺より名告ーさん
とんーうひけれど。姫君の物語ーふ妨なれば。さー私ゆ人をぐりしが。和子
と。奴家を亂こそうれ。まぐうぐうれ兄弟とふ知ゆ。ちーふ奴家が
牙を這殺ーくのとゆりと。有枝方をもちも好く。詳ゆ語ゆこえば。
万千代ぎきをーみうり。さそれ母の嘆ふんゆ嫌姐ーゆとまー。ゆとう強
の妖ゆよと。互ゆまーをとりうし。喜び涙ゆ嚥咽ゆり。万千代を泣
目をちーふ妖といい兄婦といい。不図遭ふを喜びなれど。手ゆ絡日ゆ

念じらば現世に見え来せざるこそ。いとゞ父卿も味きなし。あな悲しやと嘆くにぞ。照天姫も我まの去向いかゞと思ひ出し。ともに涙にふし沈む。娥は二人が心根をさこそと思ひ共涙袖をしめしあへずなりけり。さらに落浪を先年多氣落滅の折から万千代を伴ひ此地方に忍び来り。小萩がもとへ嫁ぎけるを。然るに今夜不意眉目好小女の二人来つ。宿を借らんといふをつくづく儀に欲心を発し彼女を売りて價を得んものと。酒買来んと偽りて同じ里なる園戸に常陸といふものありけるが彼がもとへ往よくよく商議ひて還来りし処に三人一所に集会ひ物語りするさまを垣間見ていたりしを不審に思ひ常陸と物陰に忍びしおりおのれ一人蜜女に忍びて紙門の外に身を潜めて立聞すれば。一人を照天。一人を娥にて万千代と名告り達ひ。助けまゐらせしことを語り出て互に嘆き居たるなれば。うち驚きて我子の娥を殺と。

殺裡に入んとはしたれど欲心尚やまずして胸に一物を巧みて出しそしらぬさまにて嗔嗟し日今還り来るさまにて。さと紙門をおし開きければ。三人は驚きひそくこれを見るに落浪にてありければ。心を安んじ。あとの老景を伴ひ今へ細く来る落浪は偽りて喜びさは色ばせ三人に打むかひくいくりなれば今我らが身のうへは鎌倉家を憚るが未と種む小萩あざに小栗の人々と云ことを悟りみだれは今にもあれ夫の還り来まさん附人々斯く居ることを見つけられんは必定なりよりて姫君がへ我知識方に忍びいでさん甚心を得ち人らしと思ひちてやりさられ。娥はこれを熟く聞き万千代の言はることもあらゞれ目今再も云語の末。何となく心許なく奴家もともに伴ひしの人とあれが落浪はそをなりがたしと謀りて我がいよいよ謀りさまぐど口説嘆けば落浪も詮かたと

形くて大息を衝。さほどまでなすふるとさげすくせんも心はし蘭ふぶのづ
彼亟よ往く報ぜんぞれをどふ暫時まちまくと再び対の方ふ却れ。
娥ーを問こ渇安堵行が。蜜みその殿べよ法ひく霧ふふ生居の方ふ
生くく。忍ひ中ふ一人の漢子と私語を耳をそぐて立聴よ照天を奪ん
とのふ高淺なれが。大きふ怒られ洪猿と母の仏をうち怨こ漢子の殺ると俟て
母を殺ふれで。美浪怒腹ーこちて云汝知ーぞや助ーそこれと俟ふと。
照天その妻ーりよりて彼を奪てよれ價をとり汝ふを栄利をさと
ぞくうふの。是良手ふ中ーどや。軌の仏子志ふぶと。世流ふ宜ふりし。
軌の益悲を弄へよといきまくあくふく云徴ー。流ふのるうもこくぎれが。
娥流を答くれざれを悲ーこ心祀よ湛をりうけうち笑くゃーと母う。
さぞり我ーをおぼとをいうで嬉ーとうざくんや。益益の辱なふ

笑へ今はとあり。今姫を奪ふとも。我ーく母子一生武送ぞ紀宝ーふぶ。
母ほふ知ーあとはし姫の肌ふはけまふ字ふ閻浮檀金の紀る城如意
宝珠の厨子ふ入まて持まて。これふ千金ふも値き宝なはよ。尚此
外ふ英令白銀の宝ふくあり。今僅なれ令を紀んと姫を賣ふぶ。甚
宝人の物となり形ん。不如心をなぐし欺ひく甚宝をとりまぶ。幾浮の
利ふもぐらん。と欺きけれが美浪素より欲心深きりのなれが。編ふ中と紀
らぶしていと喜びて落ひり。これ其内仏ふ今雪姫を殺ーを宝を奪ふん
と念ーぶ体。斯て生夜も更闌ぬれが。照天をも。娥をも寝さしくれと宝を奪
ふん心ぬれが照天と。娥とふ卧亟を隔く寝さーくれ。万千代ハ母の志意深し
けまが嫁と。娥寝ふ姫と已とふ卧所をかく睡襖被ーて寝ふり。照天姫と
美浪が心悪くーを知ふぶ。偽りてよく疑行を去ひ危ふきと逃れ易くし代

ゐるうと。公安塔のわどふ。豆よりの心豆しーふ身さへ労れぬれば。既ふ聽らんと。
さくと元さく女ちな体声ーて呼起とりのあり。誰うのるくんと眼氏ゑくき
着るふ嫁あてめりしうば。こゝ仏くゆぞと同ゆふ娥声を低ーくゆ公う。彩
ゆくとゝ恥ゐまーれてこゝ彩ゐら。我母莫浪ハ公きま虫なくくで豫くく助辛ゑ公
と甚間紛くくぞ。姫君ゐその配遇の方あそはーもうせば腹悪ーうもとひ。
失ひまるねふせんとあ彩を奴家多く誘めけ見どゆ聽いるべき恭もこゝ人
彩ぶれ身のうくいと危千。早く此所を立去の人とくくひ見ぶ姫ゑ絶るきこ
奴家ゆ命ハ惜ゆふ彩ど。父の仇を討ん身のみゐりふ死んハ不孝ゆ。もんこの
教みまうせ脱くたけハ脱まんと伏平を聘び出のぶいぞくらば仏ひちゐぶん
ちやそくくと急ゐてゐみ姫ハ夜裳を召ものくど。守奉ゆと首ふを裏戸
のかようり逃見出ゆう。斯とも知ふと莫浪を照天を殺ー戦宝と奈ふんと

想ふゆふ。孫静まゆを待ところふ寺の鐘かりくと音のゆよ。指火偏
めて数ゆるぶ。既ふ夜ますぞゐりよけハ。時ゐハよしとさ思ー。照天ハ臥所れ
忍び入り屏風の外ゐて窺ゆふ。熟睡ちゐとおぼーゆれば。試ふ焼火とうち
消ふ尚音も形ー。仕そゆーきりと完示ひ。隙ー移くゆ体ひ首伏ゆて
屏風とかの中り除け。聽襖のうくふ手かゆ。拳も融ると突立れば鳴呼
と叫ぶ伏声ーてゐと。聽襖を首にちうぶ。ひ。たくみうけて刺ゆれば。声くとも
たてゐを失ゆうり莫浪ハ四支の働ゆねを窺ひ。今ハ仕留ぬと喜び焼とかげ
こゝとめゆふ。何を料ん我子万千代朱ふ落くく息絶ゆうり。ゆるとゐゆうり
莫浪ハ。犯人乗のごとく忙きくと。ゆやのふ我子ぬゆゆるふ。此ゆとゆくを庶ゆるぞ。
泣ーきゆとゐんさをうゆ。ふ万千代と呼ゆ生せど。究平の涙ゆをそのかひも。
泣より外のゆぞ色。斯泣狂ーれゆとをえぶ。たとゝ鬼神ゆりとても。ゐの

角をもちべきに我子は別れる邪の怒は心火発動し。眼を揺り歯切をし。
かく嘆くと見るところ必竟照天が做業なり。扨〱に悪き女なるかな。我子
の仇敵にて怨を晴さんと立あがりつゝ声をあげ。やよ娥こゝにゐるのあり出舎と。
いと高やかに呼られども。さらに回意のあらざれば。ならばいかにと縁のうしろ。
娥を寐ませし跡にて。性理の光景見すゝめもはやなきぞと空蝉の。
りぬけの斑襖のみにして。主は影かたちもなくなりしかば。再びおどろく夜すがら。
不思議ともおもひ願望せず。裏戸よりひらきそこより出て人の出るさまは
なれば。さては子が伴ひ我淫母を照天が知らせし。此所より伴ひ落しなるべし。
親への子の為とおもひ。心を亡せども子は甚しきを弁へる賢き
志て母親を欺きぬるこそ愚なれ。是彼ものひめぐらせば照天が逆恨孫
ませり。彼よく走りきとても遠くは得こそ逃るまじ。いざ追まとてこぶ子の
仇を酬ゐんと走り出んとせる折から。腰橋をかゝげて主の小萩夜網の還ふ
間なくも門辺まで来て行遭ね主従りとやの妻よ娘も更ねずふしく
嫁より何方へとて行すぶや。女は紛ると問かけれど。ねと回答も長月の。
ふかきを陰にぞとまぎるゝなく。雨雲おほふ月影の暗きにまぎれ蒼浪を。
照天の跡を追ひ行たり。そもそも此小助といふはこれ後藤小介がふしくく。
照天姫の行衛を尋んと。兄美登小四郎ともに所々を捜索るに相模の
國に居るよし伝聞と何里の処とも知れざるが。此地方に僅の知音あるが。
姫を捜索る便もあらんと兄弟こゝに居をトして。小四郎は国戸となり。
常陸と実名し。自ら女子を買とることをぞこれ照天姫。なりし勾引
ありんとおもひてなり。小介は漁師となり鎌倉辺にても徘徊し姫乃
在家をもとめるため。然るに小介はその郷人の氷人に因て蒼浪が子代

観音菩薩の
方便
熊野の
危難
を
救ふ
蔡浪

照天姫

小栗巻之六
十七
ちよ
網代蟹
小栗
網代蟹

云もあらバ。これを妻に迎へられしとも。間話歇題照天姫ハ娥とともに脱れ
出何ゆゑをそれとまぎるゝ縁ど毒婦の難を脱れんと足にまかして走り
去り。照天ハ素より深窓に養ハれしかなれバ。かゝる風をも厭ひし
身の。今日昼のやど横山の館を脱れ出しより。追人の為に悩まされ。夫さへ
さへ失ひ。泣しきまゝがら吟呻つゝ。やう〳〵宿を求めてすこしく心を安ぜしに。
安達が原の黒塚に。あらぬ縁ごゝろも鬼にしれ主の姥が悪心ゆゑ。おとを逃て
又も忍び出ふみもならぬ道柴の。とまとえれ風も心おく。露のいのちを
うかうかへて夫に還會て后父の仇なる横山を討て本意を遂んそと思ひ
かくして心を励し平方さして落てゆく頃ハ九月廿日あまり更闌し夜半の
空密み喚しく風の身に滲るく。足さへ纖沙に踏損ずて悩みて休らくバ。
峯ろ波のとゞきまぜく。跡を追ひ来る尾輕な人うと胸うち騒れ氣亂く

とある松の木下に身を潜めて窺ふに颯々たる松風のそれかならぬか。娥
のふ照天よのふと呼を正しく蒼浪の声とおりへバおそろしく。消もうせなん
ぞうりゆて身を隠さんとすれ共所ふ不。をゆくも蒼浪ハ恐ろ。まり照天を目がけ追
めぐり既に捉へられねべうかりけるにハ。時に不思議や照天の身より一條
の光輝くと閃き出蒼浪眼眩く近寄かねどこれ怪しやと護りけり。我
ぞしかよりして心を得しと思ひしふさて変化ありたれがはたくさく
追儒院の法尉玉藻前といひしは妖婦身より光を放ちといへバ淡然に正く
野干の化生を知らずありてあらんぞらん我欺かれて万ふ代を殺しに今又娥
棄れつり。想へバ辛なる恨ありいかなる魔術を行ふとも皆み脱し得たべし
と。照天姫ふ飛かゝ了襟がみとらへ引居がら豫て浦備の短刀の鞘のまゝ
ふてはらけさる。撃手居られて照天姫阿と一声叫びしが。その其所に

絶入さり。城ハ周章慌忙て。おのゞ刃とりて姫を覆ひ。こゝ情はしと止めゝ。
萩浪怎ちまと伸し。とゝ打下と短刀の鞘掖散ゝ思ひども。嫁が肩先
ざぶと斬る。切られゝ阿と叫び伏。これハと驚ゝ萩浪ゞ慌忙く抱おこし。
膝よかきの一声うゝみ。ものゝこちゝぞ兎ゝてよ心とたゝうゝこやのつとさし
も邪こんの萩浪も子故の暗ハ氣もくれて。そゞろ泣して生せゞ城を
ゆゝく心はきいとおりゆゝ眼を開て恨めゝげハ母ゞ新熟ゝうゞめて涙を
流し。苦ゝ息をちゝと衝。嗚呼淫猿き母人うゝ。おん身の心ゝ〳〵ようゝ世ハ
例なく憂ゝ。えゝふことこそ方こんけ。おん身の為ハも奴家ハも。
照天姫と主なゝ。天おそろゝも責涙。利を貪らんとまさまハ。
多ゝ涼ハすなゝしられど。軽入なれよ給方こそ急迫。危難と脱るゞく。
心ハあゝ給ども。姫君宝と拾ゝ。ふと歎きぬれば歎られ責涙さんとそ

こゝろ。思ひ止りゝ人ども。尚ゝ底のそゝろふれ給ば。万千代丸と示し合せ。
姫と臥所を換さゝて。こゝ迫で逃れ去ゝ知よ。此仕合ハ及ぶこと。親兄
歎く天罰ゝ〳〵ん。悪の報ひハ形ぞゝり。そゝ〳〵も去ゝるのなれば。足や
前車の戒なゝり。母上悪心ハゝ〳〵ハ。奴家よかゝりて姫君を憂恤ゝひ
まをゝふ助重君ハ。涙一万千代丸や奴家ハゝことを語りゝ。ゝ身の罪
免れゝハのこ形ゝて仁恵を受ゝひ。老楽の身となりゝ。この道理と
聴ゝて終へやよ母上と諫ゝれば。萩浪いとで腹ゝちの久を承ハゝ
けゝ。奴家ハ姫を悪むとハおゝとうゝね故ぞ。そもゝ姫を人間ゝて
よもあゝじとハいうもとなれば。目今おん身こそ先
と放つゝゝ。且ハ新ぞせの笑顔ゝきふ似げゝる心の鬼ゝさ沉在夫
の身とおのゞ命にかゝゝして。露嘆くきなゝ。いゝで人の心ハあゝんや。

正しく野狐の変化して小栗の家を亡さんと謂ふて仇をなすべしや。
そを弔ふべき母とのみ。泣くばかりなる我子しのぶぐ
姫が正体を顕はせんと立かゝはを嫌泣くおのれそなた。奴家がはたらきを
今宣いせしは言語よ夫の身をおのが身ふ代らんとせへうあり
万寿代丸のなりやすしの人と同るれば蒼浪を念の涙と咽び。語り
生るも腹さしし。我姫の身ふはきし。宝と養ひ育んとし。卧所人忍び入さし
ふ。甲夜よ寝させし所。万千代丸寝さしよう。我夜のうちもいとこの。
黒夜をあやめも弁ず。我子なりとふ事わども。白刃をとりて無禅祇
三刀四刀刺ぬ。燈をかゝげてこれてあはふ。ろふあゝね我子の万千代。
朱よ染て息絶ぬ。これて狂るき嘆しうど。その甲斐さらはなくも。
万寿代丸が卧所をこれば。人影をなくて脊ふ上にはふけ。逃る生ぬ行れぬ。

我子の仇の賊天姫逃しゆゑ。とその跡を慕ふて出ぬ。
間なく姫よ行遭ふれば。必せ〳〵前後を弔ふと。撃て命を絶んと。
那〳〵ふ魔術ゆえ。不図我子ふ重傷を負。幼る嘆をこれる。
足潮賊天ふ為ん。おりくば宝る仇敵おりひ。ちゝしてこれを忘きと。
嗔恚の煩悩胸を焦し。再び賊天を呵責せんと。身がまくされば姫ハ泣く
ちゝとゝりさて。身万千代丸。おんそのまゝて殺しまふう。嗚呼猿や
めさはゝや。主君を殺しまらんと。ちゝ人ちゝけ。悪逆の天罰をゆく殺ひ
まゝ。人ちゝ二人まゝ現在我子をまふかけて。憂とこんなゝ懲も
せど。尚悪心を募らとふ。天魔が心ふ入りかゝり。大逆を道をちゝふ。
過世いうな体因果ゆく。親子とふなりゝゆゑ。親の做しこれ罪ふ。
子の身よかゝゆとゝ。とても生べ命ちゝ絶ば。のまゝ死〳〵

黄泉より見れさぞや苦艱を受るべし。其歎ハ子ぞ母人の命のあらく称を
改めざれば天罰らうて腹れまらん終する刃の錯となり非命の死をやなし
まらんよし幸ひ存命とも世に疎まるゝ身の果ハ。乞食さむひておちかさ
哀人の門辺に食を乞ひ飢餓に苦しみ道路の草村の露と消えまさん。
死して其後ハ冥間に堕ち永く浮む瀬あるべからず。これや黄路の障り。万千代
丸や奴家が身を不便とおぼされなバ。とくも心を聖にまで翻し。姫君をたすけそ
まし給と。重勝の苦痛を忠孝のあまりに心を動して流るゝ泪はいとしほらしき。
健気にも又憐なり。當時陸奥村雨の君にぞ。照天姫ハ息も吹えし
眼をひらきて重く蛾が重傷の苦痛。のの悲しやとありをるを。何故に
此手傷今さらおもへば別ぞでハ此身ぞ仇となるべきぞ。心をたしなめて
たゞと嘆けハ婦人今ぞや。最期に近き大乙時。苦しき息の下よりして。
のふかりしの姫君へ一言いへまいらせて。想ひしもどりにつえさせ給ふぞ。
晩節時の老ひより。奴家が身は身とならんハ。いと浅猿や母人の姫君
討んと志しかど。支ゆるとての此手傷。とても助かれぬいのちなれバ。この身
なき数くなりて後は。夫婦が代まで聖ん其府奴家や万千代丸のうへを
おぼし出ませ。悪人なれば身の為も母として見えず。命をもたせ助けて
身を此ことに頼まれば今世に想ひおくことなし。さらはりなら今一回主君
や親の顔を見せど。最早まぼしく見えども。ちや眼ハ見えぬかなしやな。
若しらハ母上よ。いとほしの姫君やどうか不そのも赤枯となりし秋の
草の葉にかく白露ともろともに消てあらなくなりけり。茨渡照天ハ
ともに前後ふもさと嘆けるおもひなげきのその中に。姫も蛾が死に遭て
悽ひく沈て。今日ハいかなれ悪日ぞ。前刻まで又生わかれ今又おくれ

死別は海士の小舟の楫を断。讐者の拭を失ふ。尚活場なりしも。
のふ蔭浪ぬーよ。もんこん二人の子と失ひ。さぞ悲ーーそおそこーん。
もはや此身なり。是までの事想ひ入。奴家を便なりたりのなりとおぼ
懈こまく人じゃ。ゆゑて世を生ん其財。夫諸ともに給ふ。老父慰め進ぜ
ぎーーかくふぬことを想ひし。病ひとと忠ゆふ。言語を和めさこ入ろり。
我子の別ふ蔭浪。嘆よくれて居ろり。照天が言葉を笑よりも。
思ひ出と悪念の怒の眼血とちぐ。鉄馬の歯をかみうるし。踊かんて
照天を拷ぶ。ふきくーーも云りのうる。おのれいうる変化ゆて。魔術
まうけ二人の子と。我をふかけて殺さーーおれ尚きこあを詐ーー命生んと
思ふうや。恨こそる我子の仇。ゆうろ晴きて置べきぞ。おのれが名こん生
ぐふ。内の醤ふうとてとも。尚飽ゆふどおりふうら。家ふ行責咬咬

その正体を知よし。弄殺して此胸の恨の想ひと晴ん。ふ思惟とせよと
いきよりて。磯の小舟の全身綱。これさのうひとろるうりたもくこるく
小ふ絆ゆて。傍の松ゆ沼ゆげて。小松の枝を楚とし。打弄ーー光景を
絡ふ重く地獄の罪人。悪鬼羅刹ふ呵責され。苦難を受ふ異ーーど。
照天を苦痛堪ふ。ふ邪見の人ふうとも。二人の子どもを失ふうぐ。
心を狂ひりのなるとぐ。悪念添場ふく。殺ーーも女ぐで斯ぐろう。憂恥こん
さろふ鬼ふ蛇ふ。彼中山の狼ふ。情なふて蔭浪や。天と仰ぐ噬されべ。必
其身ふかーれとふ。世の清ふそちりたくふ。己が子どもものぐまふ殺ぜ
こふ正ふ。主家ふ仇ふる報ひぞ。そを弔へど奴家とりて子の仇こと
ふくふん罪を醸とちくふどうや。奴家未練ふ命を惜ふ逃ふんとふいわふ猛
ども。此身ふ頑ありそを果さぐ死を厭へり。我志をふ遂くの后を

身命のさらに惜からねば、その心のまゝなり。いかにとも成なんに臨む時の命を助けてよ。此ことは耻ならぬ耻とせず殺してたべとかれ口説なげきつゝさらに回意なく。空嘯て菱浪が古狸か古狐か。かゝる言ても正躰を顕さねば。さもうけがたし。豫て人の云ことあり。年経し狐狸の化たるは松の小枝をされば本性をあらはさんと、班しと聞つるに、いで薫んと云ければ、松の小枝を折とりて、照天が身近く積かさね。火をさしつけんとしていへる無う。今その松枝燃しなば、幾許の苦痛を倣ざれ。不憂をみんずるその前に、今正体を顕さずや。母よくいふぞと責問へば照天怒りの涙をおとし、口さかしきその段あり。奴家をさして狐狸なんどと云罵ることそ奇怪なり。父を名武篤なとて清和の帝は末にて常陸国の一城主弓矢の道は東国に赤なれ人とられける干城なく隠れ住せり。海老名も氏もなれ賎き蜑の身なからぬや。奴家世にあれば、言ひかはせしものにありしかど故我夫の乳人なりし男君の寵をうけ、万千代丸を生りし故ゆゑなく兼畧ならぬなど助重公のかねてより聞へありし事なれば今日ゆくりなく環会る其幼根を知らざれば、なにとなく殺ひし事こそ今は口惜けれ、微ながらのふかきうらみ。彰寵奴ともいふべきれ殺さば殺せ日月の天にましますものゝ冥罰いかで脱れん。其時いひきるべしと言語もなきに云てもうち双眼閉て口のうち大悲の御名を唱へけり。其悟極めし光景に菱浪これをうちながめあざみ笑ひ、云ならへることぞかし。死宿でも海清和の後なるぞ、我まうさぬ神の御末なり。妖猿言語を巧みにし、欺くとも、いかで我をば騙むべきや今こそ思ひしらせんと積かさねたる松葉に松明の火をさしうつせと雨に濡たることなれば、よくも燃ねど鳥羽玉の黒烟のみたちのぼり。

照天が貌もさぞうあいらくこうぬまで離かるまじ烟の裏よりかるしげふ
る苦〳〵と叫ぶ声さるにぞ蔭涙足をうちすてて幼ちようげよ笑ひとみいうふ
神通自在なる狐狸なりとても今つくやゆるすも故郷ほしあま煤肆胃
とうまと招て雀踊〳〵尚もまこと松の小柴を折ゞ〳〵只顔恙しきうし
ぶ後ゆ叫ぶ声もせぞ。ゆゝ死ぬること浮りつ柴うち流〳〵て松明ゆり立
照天ふさゆをゆてのうふこゝそも物何よ松の木ゆ綿めちきしこと姫ゆ〳〵ゆを
さ〳〵ゆうなゆ記音の当像ゆ〳〵めりゆふぞ。ぢ〳〵りの蔭涙あきれ果
愕然と〳〵て居さりしゆ放逸言動の白痴ゆ斯ゆ奇特をゆるとゆゆゆと
菩提の心を発起せぞ。ゆう〳〵徒弟の悟恵を悟る。声をゆるゆ歯噛を
ゆしおのれ照天の古狐我ふいうなゆ体伝めれゆ二人の子どもを失ふきゆ。ゆくも
魔術を施〳〵て我を欺て悩をぞ。此記音も正よ足。変化なせゆゆ必定ゆ。

いぞや怨を知きんと短刀ぬひ〳〵ちゆ〳〵と切ぞ不思議や仏の化軀より。
数条の光と放らゆひ。瀬戸橋の方へ飛去ゆ蔭涙これよ驚るけど怒
ハ尚もいゆまさゆ腕をさゆゆりて後悔〳〵。我事を究くして脱〳〵つるこ
易ゆふ彼よいうなれ神通のめりともゆふゆが一念のゆゆ空〳〵ある
ぞきぞと飛去ゆ。ゆ仏の跡を尋ゆて追行ゆ今蔭ゆ泣語る芝ゆ松
の一件を圓通菩薩の利益ゆ〳〵て照天姫の危難を救ゆ且ゆ蔭涙ゆ悪
念を捨ゆ。菩提心を発起させゆゆ〳〵との方便なりしゆ愚智慳貪の毒
婦却〳〵嗔恚を募ら〳〵。仏ゆ化ゆ〳〵なゆ〳〵ゆ方ゆゆも又洗装ゆれ且説
照天姫ハ蔭涙ゆ為ゆ拘ゆられ一樹の松よ郷めゆれねゆゆゆゆおぼえしゆ
ゆゆのち何ゆゆも知ゆゆ。不思議ゆも免れて蔭涙ともゆゆかゆ形ゆ足ゆ
まゆして走りしゆ瀬戸橋の辺ゆ来ゆるゆゆゆゆゆ息も絶ゆくまでゆ労しゆ

そこの岩ほ腰うちかけ背付休ませ居たりしが首ふかけける守本尊の
いと怪しみおぼえられば古へ怪しと肌の守をとり出し小ゐる紙に居おきぬ
ゆえに盥にて清き観世音の石厨子を開き拝しかたはらに立ちさりぬ
はるばるとあるやと尋ねく折とそのれ西北の方よりして一間の老物怨悲
として孤なり此厨子の裏へ入よくえんぐわのり観世音の霊験あらたかなる
照天が奇美の想ひをなし熟くく考へるに煙と芳りの在ときめそ
さてハ奴家が身替ハ立せまふ為めの涙せんへと歌浮
回り礼拝し仏恩の有難と感謝せりさてその后ハ行末のゆくもと懇勤ふ
彩みなすと捨ろく身りし松枝の杖を傍ハ突きて大慈の悲願空ろ
を夫婦再会して姫を携山を付さしき人宿志を遂るやどるべきふふふ
ふれ松の杖ハ常盤の翠とうんせきと深く祈念一首の和歌を派ぶる

折たくひてふのちの志しの常盤なる松ハ千年ときえとはうさて
と口ずさ観音菩薩のそる像と再び首ふかけまゐせ父の本国なれば一ようず
常陸へ赴ひく昔の好身を尋んと名をさぐめ瀬戸橋をうち渡らんとそれ
処ハ悲びけ彩く後背より声をもかけど茂浪ま立さ一のぶして穂元紙
ちと投くく倒しかをん照天の古狐一回ふぶ幾許回ふれを歌く奇怪
さハ這回を見とそ脱さじと氷のごとく短刀と胸のほとりハ打ふ刺ふて既ハ
刺んとちりけと照天姫を今ハ為ん脱ぬ時と思ひ心裡ハ念ぜハ
ゆう迚も死をべ命ふかくと恥えんより入水しても自害せばハ
その身を恥ふ一めぞとつふ本文ハもかるひやをハ南無や観音大菩薩
今世を福なくあるとても未来ハ助けまゐれと祈拝とのしく茂浪
ちさ人し脱をふりそのち身を躍ぶしく瀬戸橋の上より川へ飛ぶみう

かゝれ折から一艘の小舟紙漕ひよく来りしが恰好姫をこの舟に艫乃方へと落ふさり照天を高々とさゝげ立ち上がるとゞふ同じくはめき牙をさゝんばかりに打ち立てば氣も消へさろも失せて其のまゝ息を絶へぎり時は名のうちよりして一人の漢子あらわれ出照天姫を抱きゆゝしく名の裡へ入るべく船歌うたひ船長を舵をもしきりに漕ぎ出けり藤浪とゝびをけりともさもあらばひの外ふり逃げ念いやましのきそりたく漕ぎ舟の跡を追ひ走りさんとすれどもとゝく不図も夫の小助間なくもとと行遭ひ出を我妻と捉へ出だすの夫妻妨げせそかさる敵の照天の姫ひま脱しるべいろの附らゝみを晴をことあらん其所を形し移と牙を開けて小かを使く俄然としきりに姫君ゝゝとも此面よ呻吟事ひしうとん何方へと船路うち、

茂浪を毎ゝ引けて逐ひくとゝ孫を逃さじと。ニ人して押へく足一よ姫まう人今を何をうけうまんや我を名武の譜代の臣美登の小助とつふりのなり。照天姫を家主形。その清去向をゝゝ孫とと斯さぐ母を我ゝりと。知ゝぬ事とい云なぐら主君紙佐とゝふ女を我妻とゝなりがし夫婦の縁を断とゝても。ゝゝ姫君を佐とゝゝ茂浪はメより歯切を佐も照天とは方人ゝの色すで仮ゝも我夫と云にゝるのゝを無念ゝり。つゝふゝを小栗滋重の寵妾なる茂浪を照天い後子の妻なるゝえ幻術をりく二人の子紙ゝゝるゝしゝゝる怨ゝり。妖魔の女生ゝゝんや洗ワ是紙支ゝゝるゝ斯ゝゝを逆ゝふりゝて突かくゝ足。小助あゝゝと刃をかゝし。その手を投人短刀紙取ゝゝ毎ゝ茂浪が心下紙ぐゝゝ刺ゝゝゝゝく叫ぶ声ゝ孫ゝゝも川へざんぶと投ゝゝゝ姫を家

竹の跡を慕ふて走ゆきぬ。嗚呼この毒婦茂浪道理に疎く
佛の方便を解ず。大逆を募らし。夫の為に非命に死し。遂に不祭の鬼と
なるはゆゑ。足渾つゞが作業の報なり。禍福無門惟人所召とは夫をホラ
ことを云なるべし。

小栗外傳卷之六終

北郵芳

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事　明呂子安著　東溪源謙校　白紙摺明朝綴　帙入全部四冊

題畫詩選　岡崎盧門著　全仕立全三冊

書畫皆宜　吳疑氏撰輯　白紙摺明朝綴　帙入全部三冊

題畫詩刪　森川竹窓著　全仕立全一冊

書錄　浪華心齋橋應擬北第五街　前川源七郎